

閑雅なる漢詩美術の世界 ハイライト作品

-日本と韓国の詩書画に見る文人趣味-

【ハイライト作品 1 : 日韓美術の共存共栄】

日本と韓国の美術を比較する上で絶好の作品である以下2点をご覧ください。李秀文(1403-?)は、1424年に来日したとされる日韓の美術交流において重要な画家で、越前(福井県)の曾我派の祖となったという説もあるほど。室町水墨画と朝鮮絵画の関係において鍵を握る存在です。

現存する作品としては〈墨竹画冊〉や〈林和靖図〉(京都国立博物館)が日本に、またクリーブランド美術館の〈四季山水図屏風〉は、現存する李秀文の唯一の山水画屏風です。

今回の特別展では、朝鮮前期と室町時代の美術交流が生み出した傑作を鑑賞することができます。



〈四季山水図屏風〉李秀文筆(15世紀活動) 韓国 朝鮮時代/ 日本 室町時代
クリーブランド美術館 1976.92

【ハイライト作品2：谷文晁の傑作】

江戸時代に関東を代表する南画家であった谷文晁(1763~1840)が20代の間に制作した次の2点は特に見逃せません。

瀟湘八景図—日本特有の叙情性に溢れた南画の傑作。これは、1788年、谷文晁が26歳の時に制作した傑作です。画卷であったものが、後に掛軸に表装されました。現在クリーブランド美術館には〈遠浦帰帆〉・〈山市晴嵐〉・〈江天暮雪〉・〈平沙落雁〉の四点が所蔵されています。これらを観ると、谷文晁が20代ですでに中国南宗画の様式をマスターしていたことが窺えます。特徴は、小画面でありながらも伸び伸びとした空間描写と繊細な筆法です。

観瀑図—寛政文晁の傑作。1790年、谷文晁が28歳の時の作品です。青緑山水画の色彩法を巧みに用い、山が雲のように湧き上がるように描写しています。瀧を見下ろす文人の衣装が風に吹かれている姿は、日本南画の叙情性に溢れています。

これらは、日本では河野元昭の執筆による『日本の美術 谷文晁』(至文堂、1986年)において白黒で紹介されています。



〈遠浦帰帆〉

〈山市晴嵐〉

〈江天暮雪〉

〈平沙落雁〉

〈瀟湘八景図〉 谷文晁(1763~1840)筆、江戸時代 1788、クリーブランド美術館1980. 188. 1-4



〈観瀑図〉谷文晁(1763~1840)筆、江戸時代 1790、クリーブランド美術館 1972. 16

【ハイライト作品3：梅を愛でる】

「梅」は、日本と韓国の教養人に共通して愛好されてきたモチーフです。

山本梅逸(1783~1856)は江戸時代の南画家の中で最も梅花を愛好したことで知られています。クリーブランド美術館の山本梅逸筆**〈墨梅図〉**はその中でも傑作です。迫力のある梅枝の動きは竹・蘭・菊とともに四君子をモチーフとしています。こうした南画の傑作に、1970年代から注目していたシャーマン・リー博士(当時のクリーブランド美術館館長)の眼力には、感心を禁じ得ません。

朝鮮時代の**〈鉄画梅文瓶〉**は元々日本で所蔵されていたもの。水墨画のように白磁に描かれた梅花は日本人の梅への趣向をよく表しています。その円形は月に見立てられ、宋代詩人の**林逋**の作品「**山園小梅**」の中の一句「**暗香浮动月黄昏**(あんこうふうとうつきこうこん)」を表現しています。どこからともなく梅の香りが漂い、月に夕闇が迫っているという意味です。



〈墨梅図〉山本梅逸(1783~1856) 江戸時代

1834、クリーブランド美術館 1975. 93



〈鉄画梅文瓶〉韓国 朝鮮時代 17世紀 クリーブランド美術館

1999. 44